

「文楽鑑賞教室参観会」

2018年12月11日（火）実施 JGA 第一支部研修終了レポート

12月11日（火）11:30～13:25、国立劇場小劇場にて JGA 第一支部主催による「文楽鑑賞教室参観会」が開催されました。参加人数は 22 名（JGA 正会員 18 名、非会員 2 名、運営委員 1 名、協力者 1 名）でした。

今回は、国立劇場主催の文楽鑑賞教室のチケットを団体として JGA が一括して手配して実施する参観会でした。11 時過ぎより受付を開始し、チケットと各言語別の文楽のパンフレット（英語、フランス語、スペイン語）と当日の演目のプリントを配布し、11:30～13:25 で鑑賞後自由解散としました。

鑑賞内容として、一幕目は 11:00～11:15 で「団子売」、二幕目は「菅原伝授手習鑑」で、第一幕と二幕の間に文楽についての解説がありました。

解説によると台詞を言う太夫（たゆう）は 1 人で登場人物全ての声を使い分けるとのことと、特に女性と男性の声の使い分けや喜怒哀楽の表現の仕方は見事でした。また、三味線の音色も太夫の表現する喜怒哀楽によりすべて異なり、太夫の台詞と三味線、人形の動きの息が合っはじめて感動が生まれることや、人形も三人で操られており、台詞、三味線に合わせて色々な表情を表すのは至難の業であることが良く理解できます。そうした日本人の器用さは文楽、歌舞伎、能、狂言といった伝統芸能以外にも蒔絵や螺鈿、寄木造等の工芸品や建築等にも生かされており、改めて日本人の肌理の細かさを感じ取ることが出来ました。

一幕目の「団子売」は清本節の「玉兎」から義太夫節化した作品で、太夫と三味線奏でる華やかな音楽に合わせ、団子売り夫婦の明るくひょうきんな踊りを楽しむことが出来ました。

二幕目の「菅原伝授手習鑑」では、平安時代の菅原道真が藤原時平の陰謀で太宰府に左遷された題材を江戸時代の寺子屋を舞台に再現したもので、道真の子、菅秀才（かんしゅうさい）の命を狙う藤原時平の一味と菅秀才をかばう寺子屋の師匠、源蔵夫婦との駆け引きの物語で、人の複雑な感情を見事に表現した演目でした。

上演中は台詞が現代語とは異なっている為、舞台の上部に字幕スーパーが流れ、内容も理解しやすくなっており、初心者でも充分楽しめるようになっていました。直接ガイドする機会は少ないかも知れませんが、通訳案内士として日本文化を理解するには貴重な経験だったと思われまます。